

## 俳句授業の試み

ショートストーリーの作成を中心に

## 一 はじめに

中学校の入学式で彼らと出会い、担任、教科担当者<sup>①</sup>として五年目の秋を迎えた。一二歳だった生徒たちもいまや一六、七歳の子供以上大人未満の微妙な年頃になっている。来年度には、最終学年として受験を控えており、そろそろ進学を意識した話題や授業を増やしてきている。

しかし、受験対策一辺倒の授業<sup>②</sup>になる前に国語科教育の原点である「読む・聞く・話す・書く」授業を実践したいという思いが募ってきた。いわゆる国語の授業らしい授業、つまり生徒自身が教材を理解し、感動し、それをきっかけに成長できるような授業を行いたいと考えた。五年間にわたって成長してきた生徒たちと私で国語の授業の集大成を企てたのである。

## 西 尾 勝 彦

教材は教科書の「朝顔 俳句十五句」<sup>③</sup>である。五名の俳人のそれぞれ三句が並べられている。欄外には解釈に影響を及ぼさない語句の簡略な説明があり、それぞれの作者の写真と略歴が紹介されている。

このシンプルで文学的な教材を手に授業に臨む方針としては、「生徒が読み、考え、書く」ことを中心に据えることにした。具体的には、十七文字で完結する作品を前に、その作品そのものと書かれていない前後を想像し、創造する作業（ショートストーリーの作成）に取り組ませたのである。指導書に依りかかった解釈・鑑賞文をこちらが一方的に提出するのではなく、多様な読み出し合い認め合う一連の作業を通じて、生徒たちに俳句を読むことが途方もなく豊かな文学体験であることを知ってもらいたいというねらいを持っていた。

ショートストーリー作成に際しての注意事項として、「作品・作者との距離感」を大切にすることとを繰り返して伝えた。距離が近すぎると直訳調で幅の狭い解釈しか成り立たず、逆に遠すぎるともちろん考えものである。作者から得られる登場人物像、季語から得られる季節感をまず設定し、対象との絶妙な距離感に立てば見えてくるもの（普通は見えないもの）をストーリー化するよう指導した。

ショートストーリーを「書く」ためには、まず、しっかりとした「読み」が前提となるのはいうまでもなく、難解な語句や季語、切れ字、助動詞等の解説を解釈に影響が及ばない程度に行った。ただ、十五句あるので繰り返すうちに「読む」と「書く」ことが上手になっていくであろうという楽天的な予想は持っていた。

書くことよって表現する行為は、来年度に控えている推薦入試などに必要な論理的、実用的文章と文学的、芸術的な文章とに大別できる。今回は、文学的文章を書くことになるのだが、まず、「書くことの楽しさ」を味わってもらいたいと考えた。そのためには他人に「読まれる喜び」が必要なのではないかと思ひ、多くの生徒作品を全員で共有する時間を授業の最初に設けた。また、「他者の読み」を共有することよって「自分の読み」の進歩につなげるよう促した。高校生にもなると他人に自分の文章を読まれることは、

恥ずかしいことではなく誇りであることが、授業を通じて得た印象である。

具体的な授業展開として、まず作者について簡潔に解説し、次に俳句の語句等についてもまた簡潔に解説を行った。その後、二百字前後のショートストーリーを書かせた。制限時間は七、八分であった。

## 二 ショートストーリーの紹介と分析

### (一) 川端茅舎の三句

●露の玉 蟻たちちぢと なりにけり

画家を志していた茅舎らしい観察眼の鋭さとそこはかたないユーモアを感じさせる句である。最初の俳句であるので参考までに私のショートストーリー<sup>④</sup>を口頭で紹介したが、反応はほとんど無く先行きが少し心配された。生徒の作品も私と典型的であり紹介は一編にとどめる。

### ◎主人公……アリ

私はアリだ。食糧を求めて家に進入したのはよいが、さて、出口はどこであろう……。——夜になってしまった。さて、出口らしきものは見つけたが、むこうへぬけられぬ。しかもなにやら丸いものがついているが、どうしたものか……。む？ 何者かに見られてい

るような気が……。 (板倉昌弘)

作者の視点ではなく蟻の視点でこの俳句を見た場合、蟻は作者が表現するほど「たちたち」とはなっていないというとぼけたユーモアを感じさせる。この視点の意外な転換はショートストーリー作成の一つの鍵となる。

●月光に 深雪の創の かくれなし

「深雪の創」が難解である。教科書にも何の説明もなされておらず、解釈の要所である。私のショートストーリーも「創」の解釈を避けて紹介したが、後ろの方の席から「クッサー」とブーイングが起こっただけであった。

◎なかなか寝つけず窓の外をのぞいてみると庭に降り積もった真つ白な雪の上に不思議な形の陰が見つかった。ふと空を見上げてみると陰と同じ形の鋭い三日月がぼかんと浮かんでいる。(増田尚子)

◎月の光に照らされて何思う。一人たたずむ雪原に待つ人は居ない。ただ一人うつむき下には一本の深い創。雪の切れ目。その間に何が。何も無い。もつと深い創があれば足を踏み入れてみたい。そこに何かがあるからではなく、そこに何も無いからこそ。前を向いて歩こうと思った。(中田裕子)

前者は、地上の「深雪の創」と天空の「月」に相似形を見ている。この表現がまた新たな謎を呼び起こしているようにも思え、この俳

句の持つ神秘性をさらに増しているといえる。

後者は、「創」について最もその意味を探ろうとしたもの。「無」の奥にあるものに足を踏み入れてみたいという好奇心が作者を前に歩ませたのか。

両者共に読む者の想像力をさらに試すような文章である。  
●ぜんまいの のの字ばかりの 寂光土

「寂光土」とは仏の住む国土という意味である。私は、ピクニックに行った時のような幸せな場面を發表したが、生徒たちの想像は全く違うところにあった。

◎今日の昼食にぜんまいが入っていた。体をこわしていたので食欲がない。でも、ぜんまいを見つつ春が来たと思った。長い冬が終わり僕にも寂光土のような春が来るだろうと自分に言いきかせた。(木下豪大)

◎また春が来た。ある日になると私は決まって山へ行く。今は亡き妻といっしょに、毎年のようにぜんまいを取りに行った山へ。

そこには、やはり何も変わらず、ぜんまいがたくさんあった。ここにいと妻といっしょにぜんまいを取りに来た日がありありと思ひ出す。まるで、ここに妻がいるような、ここが寂光土のような。

私はまた来年もここに来るだろう。春、舞い散る桜のように妻の

命も散ってしまった季節。(板倉昌弘)

前者には「ぜんまい」を見つけた場所、人物設定に絶妙な読みが見られる。「寂光土」もそれは現在のある状態を指し示す言葉ではなく、未来の希望を示す言葉であるとする。

後者は「寂光土」という言葉からインスピレーションを受け、「ぜんまい」の生える山が亡き妻の魂との交感の場になっているという。文章にも情感がこもっており、俳句世界にさらなる興行きを与えることに成功している。

(2) 杉田久女の俳句

●朝顔や 濁り初めたる 市の空

教科書に取り上げられている唯一の女性俳人である。目の前にある「朝顔」を見て、頭の中で想像された「市の空」をどのように結びつけるかがポイントであろうと助言をした。さらに、今回から拙文を紹介することをやめにすると言明したが、それに対してのブーイングはいっさいなかった。

◎早朝、雨戸を開けると鮮やかな色が目にとび込んできた。子供が幼いころに植えた朝顔が今年も花をつけたのだ。微笑みながら種を植えた子供の顔がはつきりと思ひ出され、街に働きに出ている我が子も白み始めた空にそろそろ起きたであろうかと心は街に向かった。

(渡邊美沙)

子供の過去と現在、それを愛情を持って見つめ続ける母親像をこの俳句に見いだしている。「朝顔」と「市の空」は、「子供」の発見によって見事に結びついたといえよう。

● 硯すずりして 山ほととぎす ほしいまま

派手で情熱家といわれた久女らしさを感じさせる句である。「ほしいまま」で結句した後の余韻をどう表現するかが課題であろう。

◎俳句を作るのにゆきづまって、気分転換で山の方へ行った。するとほととぎすの鳴き声が山の中を訝しているのを聞いた。それはまるで山全体を自分のほしいままにしているようであった。それを聞き、自分ももつと有名になり、世の中に自分の存在を響かせ、硯すずりさせようと思った。(北川督)

◎私は山に登っていた。するとホトトギスが一匹いた。ホトトギスは「てっぺんかけたか」というようにさげんでいた。それが私には「てっぺんに登ったか」というようにきこえた。私はホトトギスに腹が立って猛ダッシュで山に登っていった。(梅村祐介)

前者は、彼女の俳壇への野望を感じ取り、後者はホトトギスそのものへの対抗意識が読みとれる。深読みをすれば「ホトトギス派」に属していたとされる彼女自身が、その既成枠をうち破ろうと決意を込めた句ともとれるのではなからうか。実際にこの句作の数年後、昭和十一年に「ホトトギス」同人を除名されてはいるが……。

## ●風の落つ 楊貴妃桜 房のまま

傾城の美女の名を負う桜が、八重桜であるため花が房のまま落ちて  
ている。「八重桜」を知らない生徒を前にしばし教壇で立ちつくす。

◎あるお寺にあった楊貴妃桜を見ていると強い風が吹いた。すると  
桜が房のまま地面に落ちた。その時、どんなきれいな桜でも落ちる  
と見た目も落ちると思ったが、下に落ちた桜を見ると見た目が落ち  
るところか逆にきれいに見えた。どんなに悪いところにいようと自  
分の心がきれいなままなら悪い方にそまらず自分のそのままの姿で  
いけるような気がした。(秋山正典)

◎朝、歩いていると目の前に楊貴妃桜が落ちていた。落ちてい  
るけど、何も変わらずキレイである。

地面の上でのほうが枝にある時よりもキレイに見える。

私も楊貴妃のように恋に落ちてみたい。

落ちるたびにキレイになって、落ちているところをだれかに拾っ  
てもらいたい。(大江奈津季)

落ちた桜の前に、男子生徒と女子生徒の視点の違いが明確に表れ  
たようである。男子は落ちてもきれいな桜に気高さを感じ、女子は  
楊貴妃桜が落ちることは、「恋」に落ちることを意味しているとし  
ている。楊貴妃の人となりを視点の違いこそあれ両者共にしっかりと  
と押さえているといえよう。

## (3) 中村草田男の俳句

●つばくろ 乙鳥は まぶしき鳥と なりにけり

「乙鳥」とはつばめのこと。「まぶしき鳥」にイメージをふくらま  
す要素が多く含まれている。一見、写生の句に思えるが、「人間探  
求派」と呼ばれた草田男の意図にどこまで迫ることができるかが腕  
の見せ所である。

◎夏が今からはじまろうという時期に毎年私の元へつばめがやっ  
てくる。ひと回りもふた回りも大きく成長したその燕を見て、わが息  
子は今どこで何をしているのだろうか。会いたい……。 (野田和豊)

◎私は散歩をしている途中、暑くなってきたので飲み物を買おうと  
店へ入ろうとすると屋根の下につばめの巣を見た。親鳥がヒナにエ  
サをやっている。その家族を見たとき、苦労していた母を思い出し、  
会いたくなった。(木村万起子)

自然を詠みながらも、その奥に肉親との人間関係の存在を見てい  
る。「まぶしき」ものは、いなくなった息子、苦労をかけた母。生  
徒も「人間探求派」となった。

●勇氣こそ 地の塩なれや 梅真白

クリスチャンであった草田男を特徴づける句。「地の塩」とは聖  
書中の有名な語句で「信者が社会の腐敗を止める」という意味であ  
る。しかし、本校自体に宗教色はなく生徒たちにも全くなじみのな

言葉であったようで、全体的に表現には硬さが見られた。

◎男が道を歩いていると梅が咲いているのを見た。その梅のあまりの白さを見て、世の中の政治はあまりに腐敗しすぎて黒くなりすぎてしまっている。なぜ、それを今まで黙って見過ごす者がいるのだろうか。もっと勇気を持ってそれを指摘していかなければならない。そうすれば、もっとこの梅のように白く、つまり清らかになつていくのに、と男はずっと考えていた。(仁丹寛介)

◎白い梅が春を告げる。その純白はまるで塩に見えた。私は梅を取って地面にはらまいてみた。自分もこのように散れる勇気を持つと。(渡邊美沙)

前者は、宗教的な献身を決意する句を政治批判の句と捉えてしまっている。しかし、若者らしいまっすぐな正義感は伝わってくる。

後者は、「梅」の白さから「塩」の白さのイメージを導き出し、そこから白い「梅」の花びらを地面に落とすことよって「地の塩(白い花びら)」＝散れる「勇気」、のイメージを連想ゲームのように表現している。花びらをばらまくという行為が、宗教的な儀式のように思えるから不思議である。

●空は太初の子 妻より林檎うく

この句については、昭和二十一年の秋という時期を特定して課題に取り組ませた。それが、戦後間もない時期であるということに気づ

かせるために誘導尋問をしなければならないのが、平成一五年の国語教室の現状である。しかし、その成果は充分なものであった。

◎空はものすごくきれいだ。大昔からこんな空だったのかと思わずにはいられない。しかし目線を下ろすと、空のように果てしなく焼け野原が続く。不安でいっぱいになる。でも隣では少しはかなく笑う妻が、真っ赤な林檎を私に差し出す。私は、はにかみながらそれを受け取る。たとえこれからどんな目に遭っても私達はきつと変わらない。(永山裕季子)

◎終戦から一年。空には爆撃機が飛ぶこともなく、世界の始めであるような深い深い碧。そんな美しい空を見上げていると妻から真っ赤な林檎を手渡された。その色を見て空に散っていった多くの命に思いを馳せた。(渡邊美沙)

◎戦争が終わって、空は天地が開けた始めのように快晴で、目の前には戦争中を一緒に生きた妻がきれいな服を着て立っている。そして、私に林檎を渡した。こんな平凡な時がとても幸せに感じた。(竹村知紗)

戦後の素朴でひたすらに前向きだった頃の日本人の姿が、平成の高校生によってこんなにも生き生きと表現されている。この俳句の持つ読者を揺さぶる力は、時代を超えるものがあり、平和の尊さや何げない平凡な日常のすばらしさを感じさせてくれる。

## (4) 石田波郷の俳句

●あえかなる 薔薇撰りをれば 春の雷かみ

作者について「人間探求派」であることと結核に苦しみながら句作に励んだ人であることを伝えた。「あえかなる」とは可憐で華奢の意である。最後の「雷」が難所であった。

◎妻の笑顔を見たいため、妻にピッタリ似合う薔薇を買おうと花屋にいた。妻は淋しがり屋なのでしつかりした薔薇よりも華奢で守りたくなるような薔薇がピッタリだと思つて長い間、一生懸命選んでいた。すると、家の方から雷の音がした。妻が淋しがっているような気がして、私は早く買つて猛ダッシュで妻のもとに走つた。(大江奈津樹)

◎私はある花屋を通つた。そしてふと目をやると薔薇がいっぱいあつた。どれもきれいだつたが一つ自分の心に入つた薔薇があつた。

私は心の中からもすごい電流が走っているのがわかつた。(梅村 祐介)

前者では、薔薇は妻のために、雷は妻からのメッセージと受け取る作者の限らない優しさを表現している。

後者では、「雷」は天を轟かす存在ではなく、自分の心を震わすものと捉えており、その発想の意外さに驚かされる。

●吹きおこる 秋風鶴を あゆましむ

写生の句であろう。しかし、風が歩ませる先を生徒は見ていた。

◎暑い夏が去り、秋が来た。

鶴が背筋を伸ばして立っていると、強い風が吹いてきた。その風の強さに少し前に歩いてしまいそうになつたが、また背筋を伸ばして立ちなおした。次は冬が来る。(竹村知紗)

このたった十七文字で季節の巡りという自然界の摂理を伝えていくという。生徒の持つ想像力のスケールの大きさに圧倒される。

●栗食むや 若く哀しき 背を曲げて

「療養俳句の最高峰」と呼ばれた波郷らしい句。初句に感動の中心があり、それにどのような解釈を加えるかがポイントである。

◎自分は結核であつて長い間、世話をしてくれている妻以外誰にもあつていない。そして、結核でいつ倒れるかわからない。将来に対して非常に不安でうなだれている。しかし、自分はこうして秋になると栗を食べれるという幸せがある。その栗をむいてくれるのは妻である。自分が必要とする人というのは、いつもこうやって隣で笑つてくれるのだなあと感激しつつ、妻に対して非常に感謝している。(東野拓)

◎私は今、自宅で病臥生活を送っている。ここからは庭になつている栗の木が見えている。体で季節を感じることはできないが、目では確かめられる。小さい頃は、よく木に登つたりしながら食べてい

たけど、今は、部屋の中で一人つきりで栗を食べている。もう一度あのころに戻りたいなあ……。 (森田麻衣子)

前者は、「あえかなる……」の句で登場した妻の存在に想を得たのであろう。栗を食べることができると小さな幸せとそれを妻と共有できる大きな幸せを表現している。

後者では、病床から見える栗の木が作者を元氣だった過去へと導き、現在のみじめな状況をいつそう際立たせている。同じ俳句においてここまで解釈が分かれる例も珍しいのではないか。

(5) 飯田龍太

●秋岳しゅうがくのび極まりてとどまれり

俳人蛇笏を父に持つ龍太は、山梨の自然に親しみ句作を続けた。

「秋岳」とは、秋に遙かに望む高い山の意である。

◎ここからは他のどんな山よりも高い富士山が見えている。見上げてみるととどまることを知らないぐらい伸びきっている。一番上の頂上が空に吸い込まれているみたいだ。あんなに堂々と立っている富士山を見て私も悠々と生きていきたい。(森田麻衣子)

◎作者は、山梨にある自分の家から富士山を見ていた。富士山はもう既に伸びきってしまったこれ以上伸びることはない。自分の俳人としての才能は父に比べどこまで伸びるのだろうかとわくわくしている。(東野拓)

前者は、指導書にそのまま掲載されてもおかしくないくらいの模範的文章であろう。

後者は、「秋岳」とは遠くにそびえ立つ父の暗喩であるとし、それをいつか追い越そうと期待に胸をふくらませている。作者の事情をふまえたすがすがしい表現となっている。

●大寒たいかんの戸もかくれなき 故郷

望郷の句であることはわかるが、「どのような」望郷なのかについて表現の余地が残っていると見えよう。

◎やっと刑務所から出てくれた。どこにも身寄りがないので、久々に故郷に帰ってみた。やつぱりシャバの空気が新鮮でもとも鋭かった。故郷の駅に着くとそこは昔、自分が育ってきた頃から何ら変わっていないかった。まるで、そこだけ時間が止まっているようだった。それに、どの家も僕に背を向けず、迎え入れてくれるようであった。変わっていたのは、自分の心だけだった。(寄川航)

◎大寒のころ、正月にできなかった帰省をした。子供のころからお参りしていた小高い場所にある神社を目指し、山道を登っていた。ふと後ろを振り返ってみると、町の様子がよくわかる。そういうば子供のころもここに立って、自分が町を見守るヒーローのようだと思っていたものだと思いが思い出された。(渡邊美沙)

前者は、変わらない故郷を前に変わってしまった自分の姿を対比



させている。行き過ぎた創作であるといえるが、ポイントはずし  
ておらず映画のワンシーンのような余情を醸し出している。

後者は、かつては誰もが考え大人になるにしたいいつの間に  
忘れてしまったことを思い出している。それもやはり子供時代から  
変わらない故郷のおかげか。

●かたつむり 甲斐も信濃も 雨のなか

梅雨にうたれ続けているものは他に何があるのだろうか。

◎梅雨の日にかたつむりがいる。

そのかたつむりは毎日のように降っている雨にうたれている。こ  
の小さなかたつむりも山梨も長野もすべて同じ雨にうたれながら時  
は流れているんだなあ。やっぱり自然は大きいなと感じていると、  
小さな事で悩んでも無駄という気持ちが変わってきた。(竹間智造)  
◎今日は私は一人で留守番だ。妻は信濃にいます。夕方、ヒマだった  
のでかさをさして散歩に出かけた。するとかたつむりを発見した。  
こんなジメジメしているのかたつむりは、うれしそうに見えた。  
私もそのかたつむりを見ていたら心落ち着く。ふと妻のことが気  
になった。妻ももしかしたらかたつむりを見ているのだろうか。私は  
そのかたつむりを手にとり、信濃の方の空に手を伸ばしてみた。

(大江奈津樹)

前者は、「作者」自身も雨のなかにいるようである。「時の流れ」、

「自然の大きさ」というものに自分を位置づけた時、新たな視点  
が開かれたとする。

後者は、「甲斐」と「信濃」にそれぞれ登場人物を設定し、離れ  
ている二人をつなぐアイテムとして「かたつむり」を用いている。  
それらをすべてを包むものとして「雨」があるのだろう。この作品  
は、十七文字によって想像できうる一つの到達点といえるのではな  
いだろうか。

### 三三 まとめ

今回紹介した生徒の作品は、もちろん私が出来るのよいもの、論点  
を明示しやすいものを総数四五〇点あまりの中からそれぞれの句に  
つき選択したものである。中には、十五句すべてにわたって直訳調  
から脱することができない生徒が数名いたことは正直に報告してお  
かなければならない。

ただし、多くの生徒は、回を追うごとに俳句世界を正確かつ想像  
性豊かに受け取り、表現していたこともまた事実である。その証拠  
に紹介すべき作品の候補には付箋をつけていたのだが、その量は日  
増しに増えていき、紹介できる二点を選択するのにうれしい悲鳴を  
上げたのである。優秀作を生徒に配布する時も、「載っていないか  
らって怒らんといてや」と変な言い訳をしていた。

このことから「生徒が読み、考え、書く」方針は、多くの生徒によって実践されていたといえるだろう。少なくとも、教師が生徒を俳句世界に連れて行くというよりも、生徒たち自身が俳句世界に自ら足を踏み入れようとしたことは事実である。俳句の十七文字をきっかけにして、その奥に存在している「豊かで多様な」文学世界を発見したのは、他ならぬ生徒たち自身であった。

あるべき国語教室像というものは、これも多様なものであろう。ただやはり、生徒たちが「わかったという実感」、「できたという実感」、「参加しているという実感」を持つことが要所となるであろう。そして、その方法は無限にあるといってもよい。今後も絶えずその発見と改良に努めていきたい。

#### 【補注】

① 勤務校である近畿大学附属高等学校・中学校（東大阪市若江西新町）は、六年制中高一貫コースの普通科と三年制高校普通科、普通科国際コース、理数科を有する私立の共学校である。私は、中高一貫コースの教員として五年前に中学一年生の担任を持ち、そのまま持ち上がっている。本校は、大学の附属校であるが、無試験で近畿大学に進学できる仕組みをとっておらず（理工学部特別進学クラスをのぞく）、ほとんどの生徒が大学受験を経験する。

二〇〇三年度に私の担当科目およびクラスは次の通りであった。六年生（高三）文系普通クラス・現代文（三単位）

六年生（高三）近畿大学理工学部特別進学クラス・現代文（二単位）

五年生（高二）文系特進クラス・古典Ⅰ（四単位）

五年生（高二）文系普通クラスⅠ・現代文（三単位）

五年生（高二）文系普通クラスⅡ・現代文（一単位）

五年生（高二）文系普通クラスⅠ・古典Ⅰ（四単位）

② 過去の模擬試験問題や大学入学試験問題を数多くこなさせ、丁寧な解説をすることによって、得点率（偏差値）を上げようとする授業形態。いうまでもなく想像力は必要とされない。

③ 「精選 現代文」（明治書院）

なお、年間を通じて取り組んだ教材は次の通りであった。

一学期【中間考查範囲】

「風の学校」 沢木耕太郎

「山月記」 中島敦

【期末考查範囲】

「冬と銀河ステーション」 宮沢賢治

「世間」とは何か 阿部謹也

二学期【中間考查範囲】

「朝顔 俳句十五句」

「頭ならびに腹」 横光利一

【期末考查範囲】

「鬼灯 短歌十五首」

「ころ」 夏目漱石

三学期【学年末考查範囲】

『である』ことと『する』こと 丸山真男

④ 秋の朝、男は家の庭を眺めている。昨晩は冷えたのでたくさんの露で濡れている。働き者の蟻は、朝から庭をうろうろと歩き回っているが、

不意に落ち葉についた大きな露に出会い驚いた様子なのがおかしいなあ。  
⑤ 月の輝く夜、男は雪の町を歩いている。行き先は特に決めてはいない。空き地に目をやると、降り積もった雪が広がっている。その中に月の光によって照らし出された鋭利な創跡のような陰がのぞいている。

男はうたれたように動けなくなった。

⑥ 春、男は野に入っていった。光あふれるその場所は全く別世界のように歩いていて心地よい。日だまりにごろんと横になると、目の前に芽を出したばかりのぜんまいが小さく列をなしてならんでいる。よく見ると芽の形は「の」の字に読めるなあ。寝ころんで美しい空を見上げるとここが仏さまの国に思えてきた。